



TITLE:

雑報

AUTHOR(S):

CITATION:

雑報. 地球 1934, 22(3): 233-236

ISSUE DATE:

1934-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184330>

RIGHT:

雜 報

○高知縣高岡郡越知面盆地の化石產地 四萬十川

上流礪原村越知面盆地は古生層中の構造盆地で盆地周縁の比較的低い山地には鳥の巢、頰石兩層が発達してゐる。

鳥巢層は越知面阿谷の左岸に発達し、走向略東西、南に向つて七十度乃至八十度傾斜してゐる。砂岩頁岩及石灰岩より成り立ヶ森(陸地測量部五萬分の一地形圖越知面部落の東方八二・九米の三角點の所)附近の石灰岩、頁岩中より化石を産する、頁岩は處に依り多くの化石を含むも岩質脆弱、化石の保存惡く其の一部分鑑定にたへるのみである。

石灰岩中には、

Stromatopora sp. *Nerinea* sp.

Ostrea sp.?

頁岩中には、

Trigonia toyamai YEHARA

Turritella sp. *Auricula* sp.

Astarte sp.?

頰石層は右岸に発達し走向略前者と同様、南に向つて五十度内外の傾斜を示す。砂岩、頁岩、礫岩より成り頁岩中に次の如き植物化石を産す。

田野野マツ

Cladophlebis browniana (DUNKER)

Larniophyllum buchianum (ETT.)

下本村より

Onychiopsis elongata (GEYLER)

Cladophlebis nathorsti YOKOYAMA

Cladophlebis geyleri NATHORST

C. browniana (PUNKER)

Zarniophyllum buchianum (ETT.)

Nissonia tenuicaulis (PHILL.)?

Cyparissidium sp.?

以上簡單に化石產地として略報す。(平田茂留)

○北海道の鼯

犬飼哲夫氏の報告によると北海道には昔イタチは居なかつた、アイヌは全くこれを知らないのであるが明治になつて北海道の最南端函館へ舟から鼯が入つたらしい。それから北海道の開発につれて鼯は鐵道、海岸、河川、道路を通つて追々と北進し明治三十六年には渡島國內一圓に繁殖した、「明治三十二年の函館輸出北海道産の毛皮の中で鼯二百三十九枚價格二十三圓九十錢ロンドンへ仕向く」といふ殖民公報が出た。明治三十五年中に函館の毛皮商松下氏は、鼯八百四十七枚百二十五圓を購入したといふことである。鼯はジャバンニス、ミンクとして世界毛皮市場で重きなす。本邦全體の鼯皮の産は年額二百萬圓をこえ、五十萬枚乃至八十萬枚に達する。その中で今日北海道産は十分一に達し毛皮の良好と形状の大ききで市場で好評をうけてゐる。外國では之を染めて用ひるから毛色は問題にならない。おまけに北海道で農家に大害を與へる野鼠の天敵として、鼯は最も都合

がよいので、イタチの北海道への移住はこの上ない好いことであつた。大正以後石狩平野に出で大正八年には石狩平野全部に廣まり、日高に入り大正十年旭川に現はれ、やがて天鹽

をつき、大正九年には狩勝峠をこえて十勝國に侵入、昭和に入つて釧路の足寄をへて北見に入つた。かくて昭和九年では根室以外麴の居ないところはないが。或は既に根室にも入りかけてゐるであらう。北海道の西南半部は五十年もかゝつた分布が、残りの全島に二十年足らずで侵入した、昭和六年に五萬枚の麴皮が昭和八年に七萬枚を産出した。農家が二枚とか三枚とか副次的にとつたものが集り集まつて、年々數萬枚の確實な毛皮として海外に輸出されるのである。これを専業としても都合のよい位である。且又野鼠の天敵として得難いのであるから昭和八年十二月北海道廳は五ヶ年間北見一圓の麴の捕獲を禁止した。最初全島の麴を禁獵にしやうとして毛皮業者に一大衝動を與へたが、比較的新しい繁殖地である北見だけを禁獵地にしたことは誠に時宜を得たものであつて、將來北見が麴皮の産地として有力な土地になる見込もつくといふべきである。

そこで昭和七年三月には樺太へ北海道の生麴を數番おくつて放つたといふ、昭和九年密獵者の手で非常に優秀な雄麴二匹がとられたといふが、いづれは樺太にもこの繁殖が出来て貂の皮のかはりになると考へられる、利尻島も野鼠の害が多いので最近に麴を放つたといふ、因に新潟、廣島、徳島、富

山、愛知、三重、大分等では現在雌麴の捕獲を禁じ、之を保護してゐるのである。

○山東省の住民

山東省民の八、九割は農民である、人口増加の率の多い土地であるから年々他省に出稼するもの二十萬を下らないので山東苦力の名がある、しかしこの省の人は愛郷心が強く粗衣粗食にたへて出稼するも蓄財が出来ると歸國する、蓄財の目的は未婚者は求妻の爲であり、既婚者は故郷で土地をかうためである、其特質は舊慣を墨守する、金錢に執着心が強く、簡易生活になれ、他省の勞働者よりも低廉な賃金に甘んずる、飲酒する者が多いが亂醉はしない、妻帯するまでは性的の禁慾を守る、盜癖と賭癖がある、増長する、智識程度は低級で理解力乏しく研究心も少いが、先輩の指導で同族の黨盟をつくる傾が強い、氣慨心乏しく複雑な仕事には向かないから、分業作業がよい、自己の面子を重んずることは中國人一般とかかりない。

生活程度が低く、消極的に貯蓄をはかるこの省の人民は精神的にも同様で、極めて頑固であるから、耶穌教の傳道が他の省よりも多いにも拘はらず、其省民に及ぼした影響は極めて少く、たゞ布教師が彼等の手藝によつて、髮網や花簪の製造、豚毛の調製等を助長した程度に止まつた、衣服は冬は獸毛を用ひるが一般は淡紺色の綿布を用ひ中流以下では冬期二十元程度、夏期五元程度の衣服装を普通とする。

一般住民の食物は米食するもの極めて少く、都會の中でも

富者で三食中一食位を米食にする程度である、他は多く麥飯頭、油餅包子等を食し粟粥を非常に愛好する、副食物としては豆腐、豆菜、生葱、野菜、漬物、蒜等を用ひ、中流以上のものでは鹽魚、昆布、豚肉等を一週二三回の程度に用ひる、勞働者の食費は自らやすく、炭坑夫一日二十仙、農夫十仙、雜役夫十五仙、車夫十五仙、線路工夫二十仙、職工級二十五仙位であるから、人力車夫がどこまで十仙で快走する筈である、今細民の食事をのぶれば餅子は粟又は高粱を粉末とし、之に大豆又は野菜の細切にしたものを混じて捏ね一個半斤位の團子としたものであり、黏粥とし高粱の粗粉又は粟を以て製した粥をつくり、四時之を食ふ、大豆を磨碎して之に大根を入れ煮沸したものを小豆腐といひ飲用に供し、地瓜干とて甘藷をうすく切つて干したものを農繁期に食し、冬期は甘藷をむして食ふ、饅頭は小麥粉でつくり祭日又は貧客の接待に食する、小饅子は小麥粉をねり上下より火力でやいたもの黄色の扁平な饅頭であるが時々食するにすぎず、小麥や粟や高粱を米のやうに炊くこともあるが、祭日に用ふる程度である。副食物は野菜又は大豆を油又は鹽で煮たものを用ひ、祭日などになると鶏肉又は豚肉を食ふ大抵は朝夕の二回であるが農期には三回である。

いづれにしてもこの勤勉な省民の食物がかやうに安價で賃銀の低いといふことは、もしもこの地方に將來工業が勃興した時に可驚き影響を與ふるものといはねばならない。

○樺太アイヌの近況

昔は廣く全島に居たといふ傳説があるが、領有當時には東西海岸と中央内淵川の沿岸各地に散在してゐるに過ぎなかつたので、之を集める必要を認め大正元年から三年までの間に東海岸に五ヶ所、西海岸に四ヶ所の集團をつくつた、昭和八年以後戸籍法をつくり、現在全島で三百二十九萬一千三百五十四人となつてゐる。

夏は近海で漁撈に従ひ冬は狩獵で生活してゐたが半農半漁の方法で之を導いたから、馬鈴薯や菜根をつくるやうになつた、衣服は多く草木の皮で製したアツシであるが、オヒヨウ(木)又はエラ草の皮を剥ぎ水に濡し冬期越年中に糸に製し之を織る、禮服をつくる場合には刺繍を施すので一枚の着物に三年もかゝるといふ、現在は男子は洋服をき、女子は内地人に倣ひ帯や羽織を用ふる、裝飾具としては男女共に耳環をつけ、婦人の年長者は一般に上唇に黥をすること北海道アイヌと異はない、主食物は魚類で其主なるは鯿及鱒で何れも收穫期に之を割き、乾燥して貯藏し、冬期の食料とする、夏は生魚を海水にて煮沸し又は焼き海豹の脂肪にて調理したもの、を食ふ、海豹の脂肪は、海豹の油肉を鍋に入れて煮沸し、脂肪の滲出するを掬ひ、其の胃袋の洗滌して乾した袋に貯へるのである、副食物には野生の百合根、キト、トマ、コザク、ぶき等を生又は乾して用ゆ。

家を建築するには汚穢凶妖の地をさけ最も清淨の地を選び、大小の別はあるが、一般には四方に柱をたて、粗雜な丸

太を積上げ屋根と周圍は樹皮又は草を編みて之を覆ひ、度器なきを以て其長短をはかるに手又は指長を以てし木根藤葛等にて緊縛する、現在は大工も出来だした、土間の中央に大なる爐をつくり其上部に煙出兼採光のため二、三尺角の天窗をあげ室の兩側に高さ一尺五寸幅二三尺の床を設けて寢臺にする、左側の床の隅に必ず家神を祭る。家財道具食料を貯へる爲に倉をたてるものがある、便所は設けること少かつたが、近頃増加した。

各部落の總代があるが多くは元の酋長である、父又は長兄を以て家長とし長幼の序は正しい、男子は農業狩獵に従ひ、女子は裁縫、炊事、採薪に従ふ、家督は普通長子之を相続するも事故ある場合は次男三男順次に譲る、一説に家長の生存中長男妻を娶らば別居し、二男三男亦かくの如く、家長死去の時同居せる男を後嗣とする、長男と定める掟はない。

結婚は双方の同意による、他から干渉がない、別に儀式は行はないで、同居を以て結婚と見なす、離婚も頗る簡單で其數は多い、死を語るを甚だしく忌むも死事は決して忽にせず死者あれば斂葬の具を備へ親族故舊相集り慟哭數日に及び、生者の所持品及寶物を棺に入れて埋葬し墓標を立つるものは少い、埋葬すれば死者は神となるものと信じ、墓の掃除又は墓參等をもなすことがない、死者あれば三日にして爐の火をかへて新にし、變死者の場合には其家をやき又はこぼち、疫病の場合には其家を捨てゝ顧みないのである。

○ペルー外國貿易

一九三三年のペルーの貿易は最近十

ケ年になく激減である、原料國であるから多くの製品は海外から輸入を仰ぎ米國第一位全輸入の三割を占め英、獨、アルゼンチン、カナダこれにつぎ日本は第十四位にあたる、輸出は輸入額よりも少く多い棉花(タンギス白色優良種)をはじめ皮革類、アルパカ、ワリオン、羊毛、棉花副産物、砂糖、木材類、唐辛、米、珈琲、果實に及び、鑛産物としては銅及その原鑛、石油類を出しガソリン及重油の産が多い。近年この國に毛織工業が勃興したから、その將來は刮目されてゐるが、現在は毛は主として英國へ輸出されてゐる、棉花はタンギスの外にアカラ種ビーマ種などがあるが白色のタンギスはイカ縣地方に産し、ビスコ港から輸出されその六割五分は英國へ向けられてゐる、米國之につぎ、日本へは僅に一〇九萬を送つたにすぎない。

石油は當國輸出の大宗で、七千八百萬ソールに上りガソリンが首位にたち、和蘭、英國、佛國へ仕向けられてゐる、重要貿易港はカイヤオ、サラウエリー、モリエンド、及ビスコの四つで何れも日本郵船會社の定期船が寄港する。